



高橋 司

弁護士。1963年生まれ。北海道大学大学院法学研究科修了。「公事官法律事務所」代表。

小説「流浪の月」の内容を引用しながら話を進めよう。主人公の1人である更紗は9歳の時に大好きなお父さんを亡くし、その後、大好きなお母さんは更紗の目の前から姿を消した。独りぼっちになつた更紗は叔母に引き取られ、窓の小さな2階の部

従兄弟である孝弘が更紗の部屋に夜な夜な入ってきては性的な関係を求め続けた。ドアノブが軋んで回る不快な音が鼓膜を満たし、更紗は硬直したまま時間が過ぎるのを待つていた。叔母宅で食べる食事は味もせず、熟睡することができないことはもちろん、安息の時間すらない。更紗は「家に帰ったら、孝弘が死んでいてくれないかなあ」と思いながら放課後すぐに家に戻らず児童公園で遊んでいると、ベンチに座つて本を読み続けるもう1人の主人公である大學生1年生の文（19歳）と出会う。更紗は「帰りたくないの」と言い、文からの「うちにくる?」との問いかけに「いく」と答え一緒に暮らし始めた。しばらくの間、更紗は1歩も外に出なかつた。更紗は文の家で熱望していた安全を手に入れ、寝不足は完全に解消し夜も怯えずに過ごせるようになつた。一緒に暮らすようになつて2ヶ月が過ぎ、文は更紗の願いを受けて動物園にパンダを見に行つたが、付近の人たちは更紗の姿を見て官に文は逮捕され、更紗は保護された。カウンセラーから「緒にいるとき、お兄ちゃんは、更紗ちゃんの身体にさわったことがある?」と聞かれ、更紗が「文はなにもしてない」と答えるても信じてもらえないかった。その後、更紗

はすつと「家内更紗ちゃん誘拐事件」の被害女兒であつた女性として見られて、ただ笑つただけで「無理をしているのではないか」と思われ、逆につむいただけで取扱注意のシールを貼られた。更紗は出口のない思いやりで窒息しそうになつて、いた。更紗はいふ。「どんな痛みも誰かと分けあえるなんて嘘だと思う。わたしの手にも、みんなの手にも、ひとつバツクがある。それは誰にも代わりに持つてもらえない。一生自分で抱えて歩くバツクの中に、文のそれは入つて、いる。わたしのバツクにも入つて、いる。中身はそれぞれちがうけど、けつして捨てられないのだ」と。また、更紗はいふ。「負の感情だけをぶつけてくれるなら、いつそう楽だと思う。怒りや蔑み、上からの哀れみ、そんなのなら、なんのためらいもなく投げ捨てられる。けれどその中に時折、優しい気持ちが混じる。この人を理解したいとか、自分になにができることがないかと、そういう善意がわたしの足をつかみ、そつちにいつてはいけないと強く引き留める」。しかし、「中途半端な理解と優しさで、わたしをがんじがらめにする、あなたたちから自由になりたいのだ」と。

学時代を振り返ると自らの軌跡が刻まれている線の深さみたいなものを感じることができ。しかし、いまでは振り返つてもその軌跡自体がぼんやりしてよく見えない。しかも、何所にもわかつてその軌跡は途絶え、消えてしまった場所に近づき、その軌跡の記憶を辿ることもできない。私が生業としている弁護士稼業の姿、形も中途半端な理解と優しさで成り立つていてもしかり。更紗が言うとおり、「誰にも代わりに持つてもらえない。一生自分で抱えて歩くバック」の中身を見ることもできないれば、代わりに持つことなどできない。懸命になって考えて、いるつもりでもすべてが中途半端な気がしてならない。弁護士だけではなくプレーヤーの仕事というものに従事する者たちはいつも足りないことしかできない。プレーヤーに用意された道などない。ギリシャ神話には、古典的な仕事として医師、法律家、聖職者の3つが記載されていると聞く。少なくともこれららの仕事に従事する者たちはいつも「求道者」でなければならぬと思う。不十分なことしかできないことを思い知り、それが、更紗の言うところ、中途半端な理解と優しさしか示すことができない業だったとしても、自らができることを続けるしかないのだろうと思う。